



2013年2月18日

東日本大震災後の人々の意識の変化をよむ 「今後の生活に関するアンケート」の結果概要 ～『ライフデザイン白書 臨時調査』より～

第一生命保険株式会社(社長 渡邊 光一郎)のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所(社長 長谷川 公敏)では、全国の18～69歳男女約1,700名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

＜調査結果のポイント＞

【地域】近所づきあいの変化(P. 2)

- 2010年から12年にかけて、近所づきあいは増えてはいない。

【地域】近所にいる人(P. 4)

- 「世間話をする人」「相談できる人・頼れる人」をはじめ自分と接点のある近所の人減少。

【地域】日頃の不安(P. 5)

- 「地震」をはじめ各種の災害・犯罪に対する不安が減少。

【地域】地域の安心・安全のために必要なこと(P. 6)

- 地域の安心・安全のために必要なこととして、「日頃からの近所づきあい」をあげる割合は減少。「防犯・防災意識を高めるための啓発活動」をあげる割合は増加。

【家族】今後つきあいを深めたい人(P. 7)

- 今後つきあいを深めたい人として、「家族」をあげる人の割合が71.4%で過去最高。2010年から12年にかけて、「地域や近所の人」「職場や仕事関係の人」「家族以外の親族」をあげる割合は微増。

【家族】夫婦関係(P. 9)

- 夫婦関係は密接になっている。中でも配偶者と余暇や休日と一緒に楽しむ夫婦が増加し、過去最高の割合に。男性は配偶者を経済的に頼りにせず、女性は配偶者を経済的により頼りにするように変化。

【家族】親子関係(P. 11)

- 子どもと会話、相談、余暇をする父親・母親が増加。

【家族】家庭の役割意識(P. 12)

- 2010年から12年にかけて、＜父親＞が復権。男女とも「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「夫は、家庭よりもまずは仕事を優先させるべきだ」という意見を支持する割合が上昇。

【充実感・人生設計】充実感(P. 14)

- 「趣味活動やスポーツをしているとき」をはじめ、さまざまな場面において充実感を感じる人が増加。

【充実感・人生設計】人生設計(P. 16)

- 2010年から12年にかけて、人生設計をする人・考える人が大幅増加。

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当(安部・新井)
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

《調査の実施背景》

本調査は、当研究所が実施してきた生活定点調査であり、人々の生活実態と意識について、時系列で把握できるように設計されたものです。調査はこれまでに1995年、97年、99年、2001年、03年、05年、10年に実施し、今回臨時調査を行いました。調査方法は以下の通りです。

今回調査は、東日本大震災（2011年3月11日）後に人々の「家族」「地域」との絆は強まったのかどうかを明らかにすることを目的として、2012年11月に実施したものです。

《調査の調査概要、回答者の属性》

(1) 調査概要

調査対象：全国の満18～69歳男女個人

抽出方法：層化2段無作為抽出

調査方法：訪問面接法

※第7回までは訪問留置法。

時期・標本数・有効回答数：下表参照

調査機関：一般社団法人中央調査社

調査	時期	標本数	有効回答数	報告書
第1回調査	1995年1月19日～2月7日	3,000	2,352	ライフデザイン白書1996-97
第2回調査	1997年1月10日～1月27日	3,000	2,372	ライフデザイン白書1998-99
第3回調査	1999年1月22日～2月8日	3,000	2,210	ライフデザイン白書2000-01
第4回調査	2001年1月19日～2月5日	3,000	2,254	ライフデザイン白書2002-03
第5回調査	2003年1月22日～2月10日	2,000	1,472	ライフデザイン白書2004-05
第6回調査	2005年1月12日～1月27日	3,000	2,128	ライフデザイン白書2006-07
第7回調査	2010年1月9日～1月31日	3,000	1,986	ライフデザイン白書2011
今回調査	2012年11月2日～11月18日	1,687	1,149	ライフデザイン白書2013（小冊子）

(2) 回答者の属性（性・年代別、地域別）

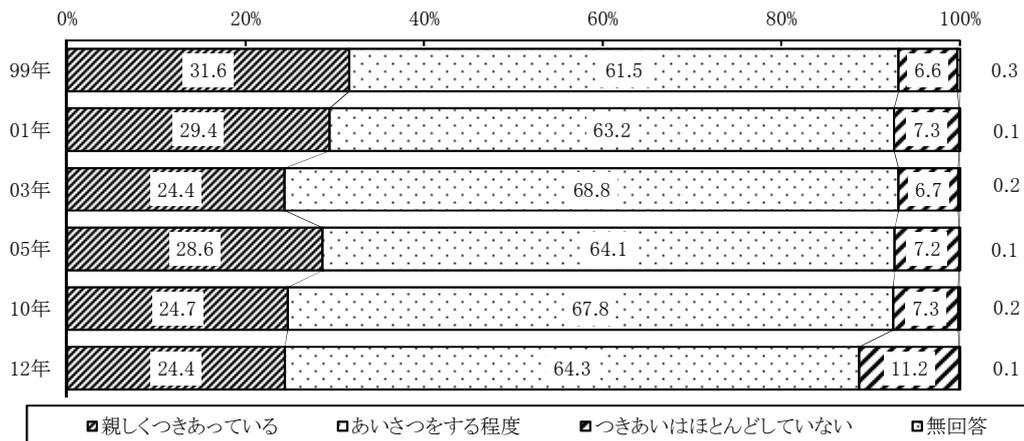
	全体	18～29歳	30代	40代	50代	60代		全体
全体 該当者数	1,149	195	262	239	222	231	全体 該当者数	1,149
%	100.0	17.0	22.8	20.8	19.3	20.1	%	100.0
男性 該当者数	551	87	139	106	93	126	東日本 該当者数	524
%	100.0	15.8	25.2	19.2	16.9	22.9	%	45.6
女性 該当者数	598	108	123	133	129	105	それ以外 該当者数	625
%	100.0	18.1	20.6	22.2	21.6	17.6	%	54.4

東日本とは、北海道・東北・関東を指す。

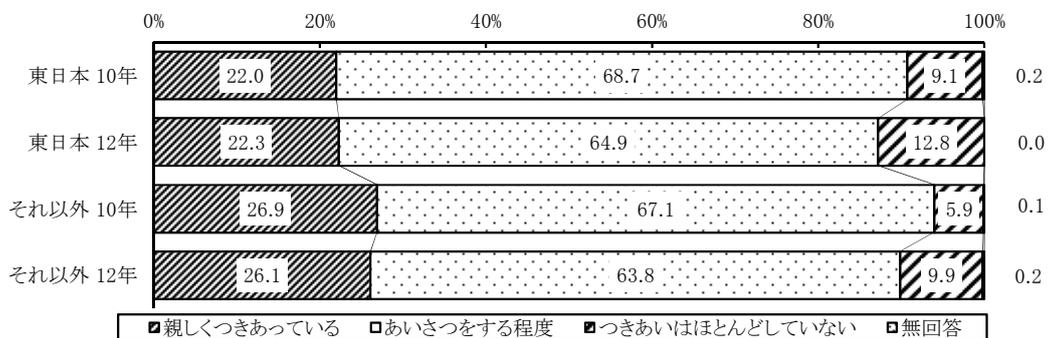
【地域】近所づきあいの変化

2010年から12年にかけて、近所づきあいは増えてはいない。

図表1 近所づきあいの程度(全体)

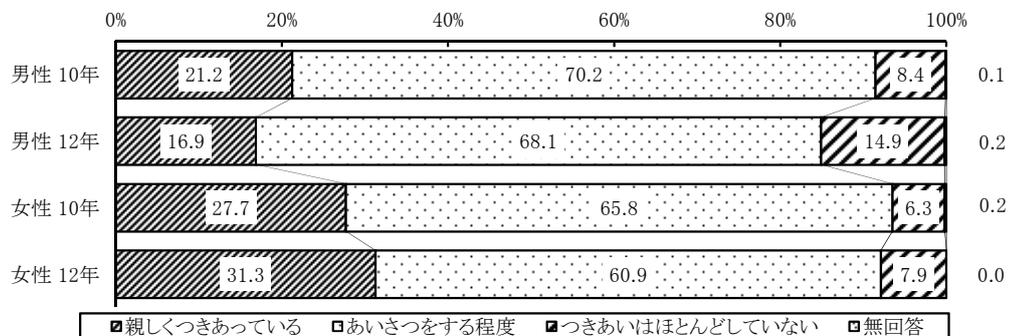


図表2 近所づきあいの程度(地域別)



注:この図表の「東日本」は、北海道・東北・関東を指す。

図表3 近所づきあいの程度(性別)



近所づきあいの程度をたずねたところ、「親しくつきあっている」人の割合は24.4%にとどまり、「あいさつをする程度」の人の割合が高くなっていました。「つきあいはほとんどない」人の割合は11.2%であり、99年以降で最も高くなりました。

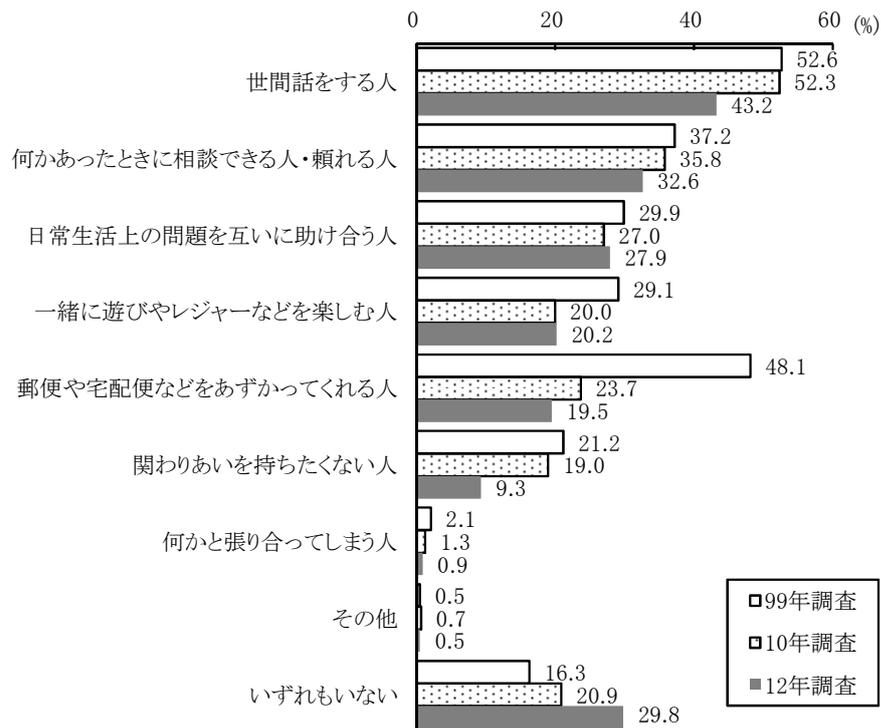
東日本においても、近所づきあいの程度は、2010年と2012年の間に増えてはいません。

性別に「親しくつきあっている」人の割合をみると、2010年から12年にかけて男性では減りましたが、女性では増えました。

【地域】近所にいる人

「世間話をする人」「相談できる人・頼れる人」をはじめ自分と接点のある近所の人は減少。

図表4 近所にいる人(全体)＜複数回答＞



図表5 近所にいる人(地域別)＜複数回答＞

(単位:%)

	世間話をする人	何かあったときに相談できる人・頼れる人	日常生活上の問題を互いに助け合う人	一緒に遊びやレジャーなどを楽しむ人	郵便や宅配便などをあずかってくれる人	関わりあいを持ちたくない人	何かと張り合ってしまう人	いずれもない
東日本 10年	49.0	33.6	25.0	20.6	22.8	18.5	1.2	22.8
東日本 12年	43.7	31.9	24.6	18.3	17.6	8.8	0.4	29.4
それ以外 10年	55.3	37.8	28.8	19.7	24.6	19.5	1.3	19.6
それ以外 12年	42.7	33.1	30.6	21.8	21.1	9.8	1.3	30.1

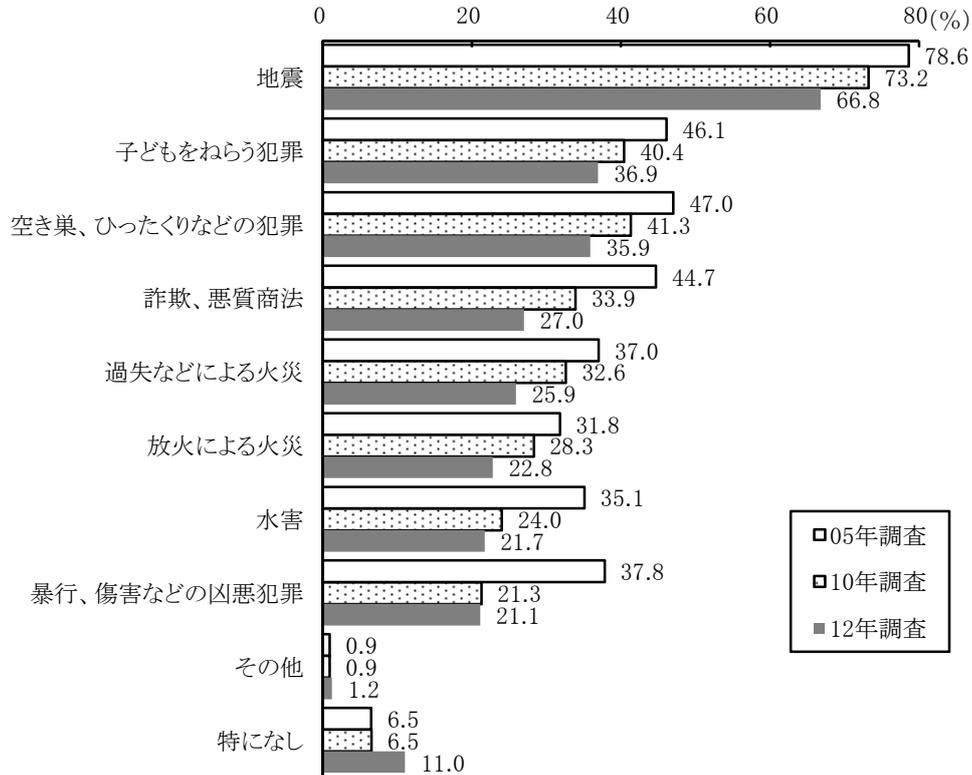
近所にいる人を尋ねた結果、「世間話をする人」は2010年の52.3%から2012年の43.2%へと減少しています。同様に、「何かあったときに相談できる人・頼れる人」も減っています。

東日本においても、「世間話をする人」など自分とさまざまな接点のある人は減っています。

【地域】日頃の不安

「地震」をはじめ各種の災害・犯罪に対する不安が減少。

図表6 日頃から不安に思っていること(全体)＜複数回答＞



図表7 日頃から不安に思っていること(地域別)＜複数回答＞

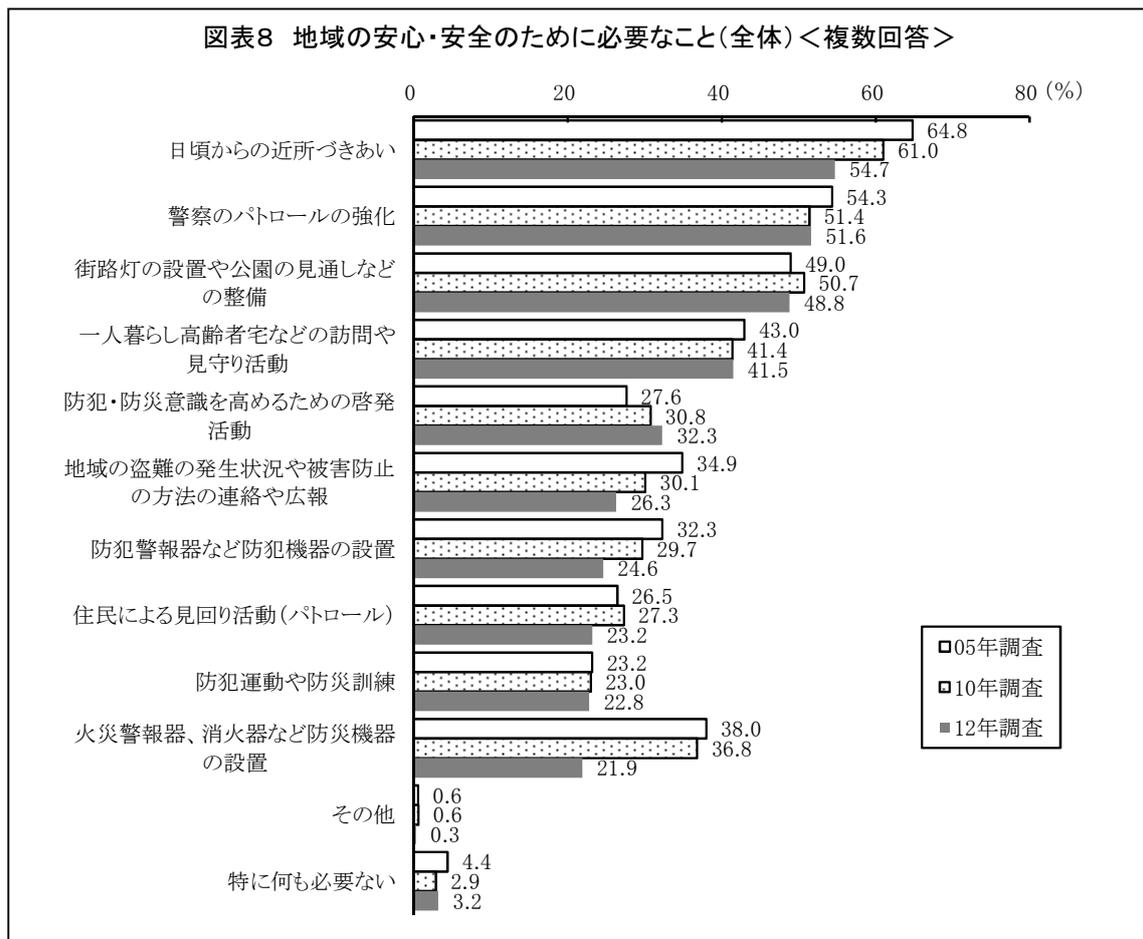
	地震	空き巣、ひったくりなどの犯罪	子どもをねらう犯罪	詐欺、悪質商法	暴行、傷害などの凶悪犯罪	過失などによる火災	水害(台風を含む)	放火による火災
東日本 10年	74.3	44.6	40.5	35.8	22.1	32.6	16.1	30.4
東日本 12年	69.8	36.1	34.9	27.5	23.1	26.3	19.1	23.5
それ以外 10年	72.6	38.9	40.4	32.5	20.8	32.7	30.3	26.7
それ以外 12年	64.3	35.7	38.6	26.6	19.5	25.6	23.8	22.2

日頃から不安に思っていることを尋ねた結果、「地震」をはじめ各種の災害・犯罪に対する不安が減少していました。例えば、「地震」をあげた割合は、2010年に73.2%でしたが、2012年には66.8%になっています。

地域別にみると、2010年から12年にかけて、東日本では「地震」をあげる割合は減りましたが、「水害」をあげる割合は高まりました。

【地域】地域の安心・安全のために必要なこと

地域の安心・安全のために必要なこととして、「日頃からの近所づきあい」をあげる割合は減少。「防犯・防災意識を高めるための啓発活動」をあげる割合は増加。



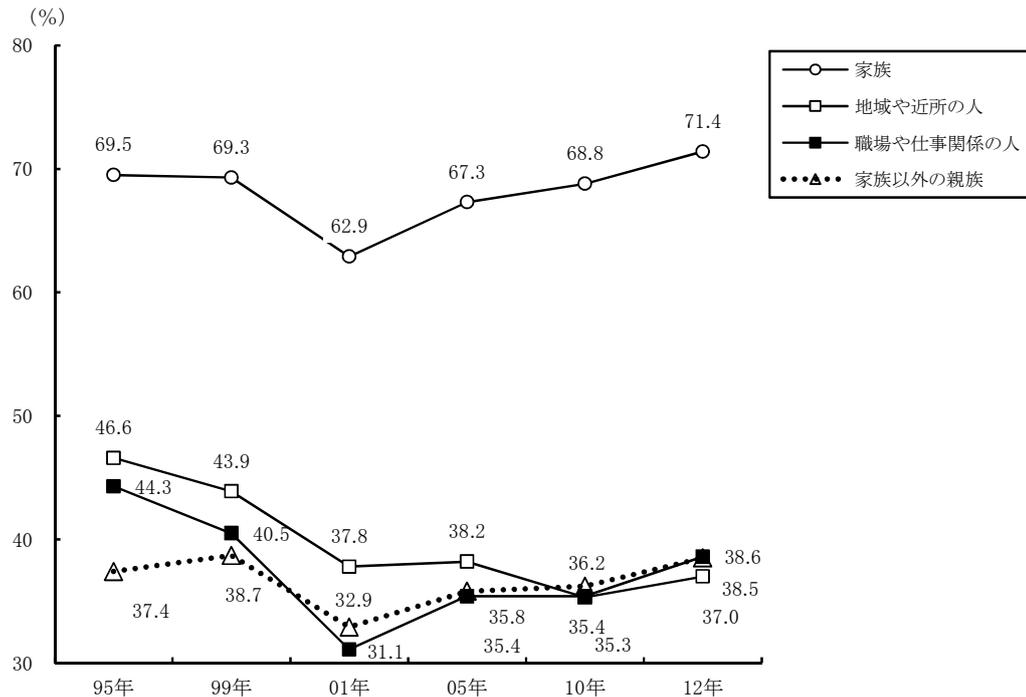
地域の安心・安全のために必要なことを尋ねた結果、最も多くあげられたのは、「日頃からの近所づきあい」の54.7%でした。しかし、2005年以降、この項目をあげる割合は減少しています。

「防犯・防災意識を高めるための啓発活動」をあげる割合は、2005年以降増加する傾向です。

【家族】今後つきあいを深めたい人

今後つきあいを深めたい人として、「家族」をあげる人の割合が71.4%で過去最高。2010年から12年にかけて、「地域や近所の人」「職場や仕事関係の人」「家族以外の親族」をあげる割合は微増。

図表9 今後つきあいを深めたい人(全体)＜複数回答＞



注：この他の選択肢には、「学校・学生時代の友人」「趣味や習いごとを通じての友人」「子どもを通じての友人」「配偶者を通じての友人」「その他の個人的友人」「つきあいを深めていきたいと思う人はいない」があるが、表記は省略。

図表10 今後つきあいを深めたい人(地域別)＜複数回答＞

(単位：%)

	家族	地域や近所の人	職場や仕事関係の人	家族以外の親族
東日本 10年	68.9	34.9	35.0	35.0
東日本 12年	74.0	35.7	37.8	37.2
それ以外 10年	69.2	36.0	36.0	37.3
それ以外 12年	69.1	38.1	39.2	39.5

図表 11 今後つきあいを深めたい人(性別)＜複数回答＞

(単位：%)

	家族	地域や 近所の 人	職場や 仕事関 係の人	家族以 外の親 族
男性 10年	67.4	37.5	42.0	35.6
男性 12年	63.2	34.7	43.7	34.8
女性 10年	70.0	33.5	29.8	36.7
女性 12年	78.9	39.1	33.8	41.8

今後つきあいを深めたい人を尋ねた結果、「家族」をあげた人が過去最高の71.4%となり、2位以下を大きく引き離しています。

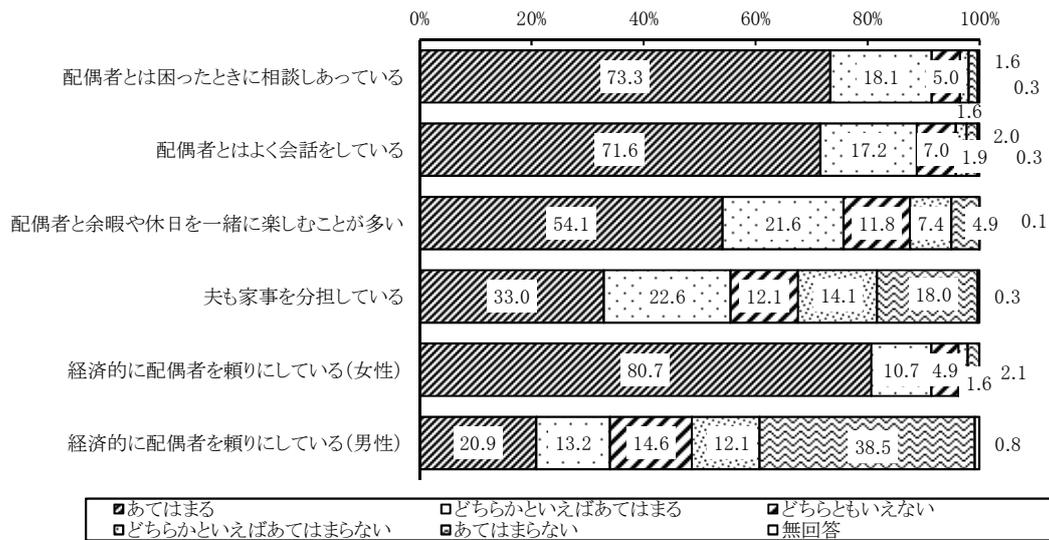
2010年と12年を比較すると、「家族」をあげた割合は、東日本で68.9%から74.0%へと大幅に上昇しました。性別にみると、「家族」をあげた割合は、男性では減りましたが、女性では増えました。

「地域や近所の人」「職場や仕事関係の人」「家族以外の親族」をあげた割合も、2010年よりも12年の方が高くなっています。

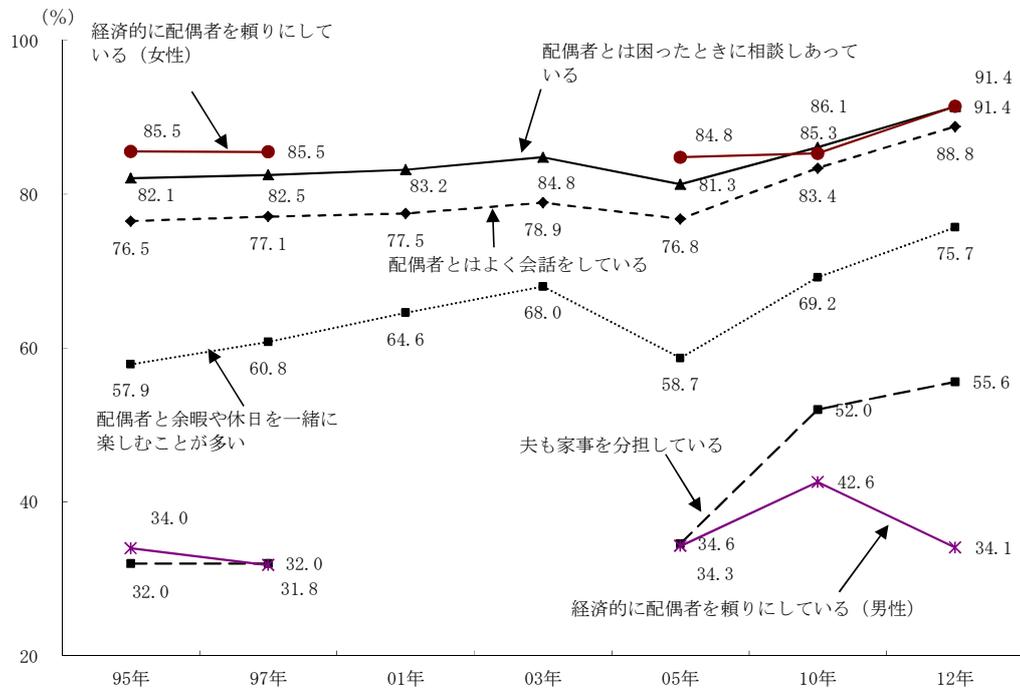
【家族】夫婦関係

夫婦関係は密接になっている。中でも配偶者と余暇や休日と一緒に楽しむ夫婦が増加し、過去最高の割合に。男性は配偶者を経済的に頼りにせず、女性は配偶者を経済的により頼りにするように変化。

図表 12 夫婦関係



図表 13 夫婦関係の推移



注：「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と答えた割合。

夫婦関係の現状を尋ねたところ、「配偶者とは困ったときに相談しあっている」「配偶者とはよく会話をしている」という項目に、あてはまる（「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」）と答えた割合は約9割にのびました。「配偶者と余暇や休日と一緒に楽しむことが多い」という項目についても、4人に3人があてはまると回答しています。

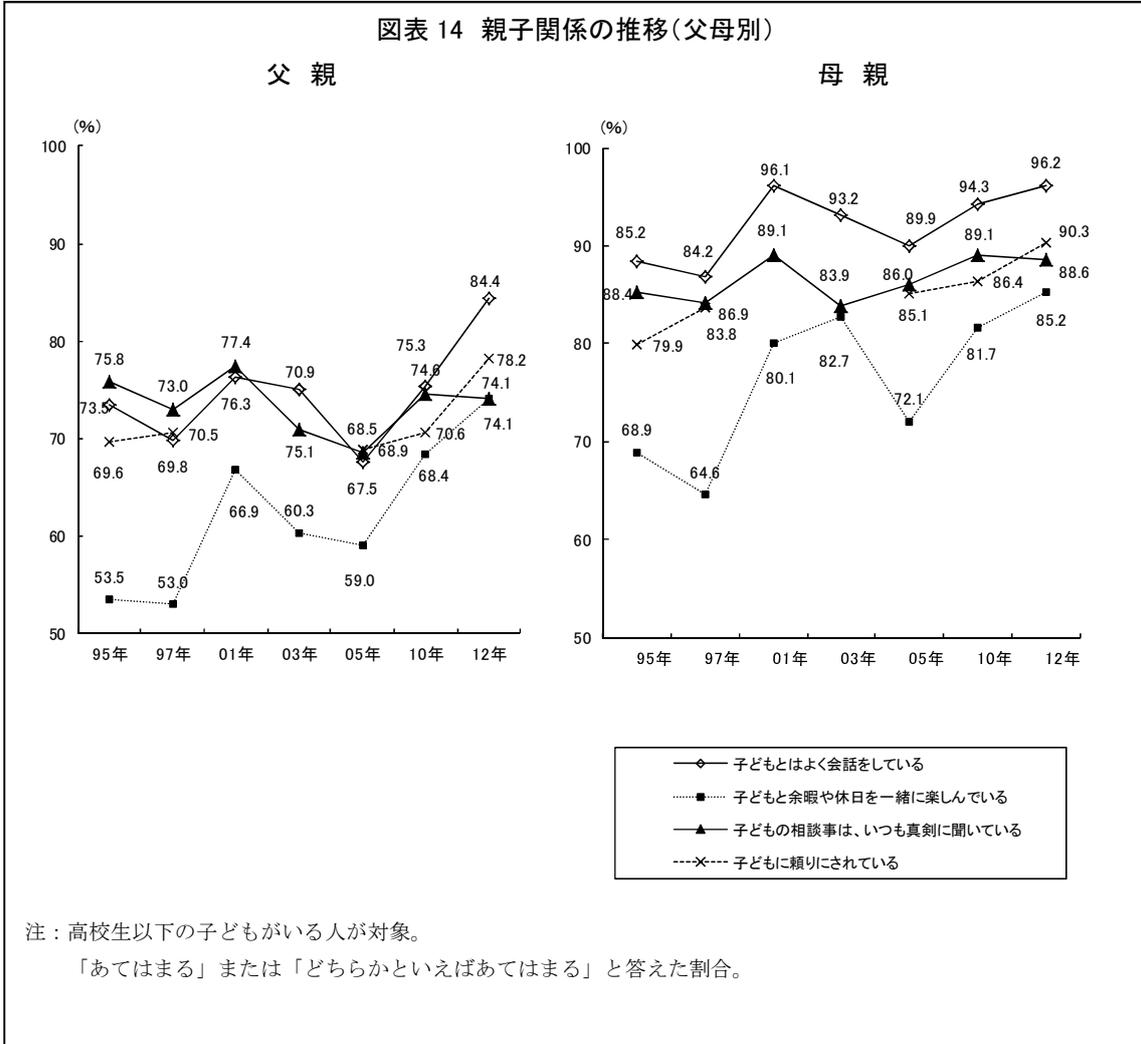
「経済的に配偶者を頼りにしている」という項目は、男性と女性で回答の傾向が大きく違います。あてはまると答えた割合は、男性が34.1%であるのに対して、女性は91.4%になっています。

時系列でみると、「配偶者とは困ったときに相談しあっている」「配偶者とはよく会話をしている」「配偶者と余暇や休日と一緒に楽しむことが多い」という項目にあてはまると回答した割合は、95年以降、おおむね右肩上がりに高くなってきています。「夫も家事を分担している」という項目にあてはまると答えた割合も増加しています。「経済的に配偶者を頼りにしている」という項目は、95年以降女性は増加しています。一方、男性が「経済的に配偶者を頼りにしている」割合は、2010年から12年にかけて減少しました。

【家族】親子関係

子どもと会話、相談、余暇をする父親・母親が増加。

図表 14 親子関係の推移(父母別)



親子関係の現状を尋ねた結果、子どもと会話、相談、余暇をする父親・母親は増えてきています。

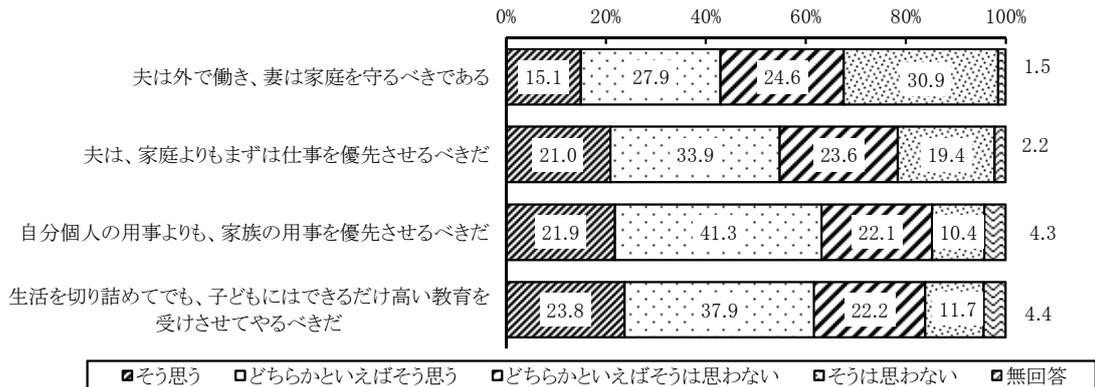
父母とも、「子どもとはよく会話をしている」「子どもと余暇や休日と一緒に楽しんでいる」「子どもに頼りにされている」という項目にあてはまる（「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」）と答えた割合は過去最高になりました。

父母を比較すると、父親よりも母親の方が、全ての項目についてあてはまると答えた割合が高くなっており、父子関係よりも母子関係の方が密であることがわかります。

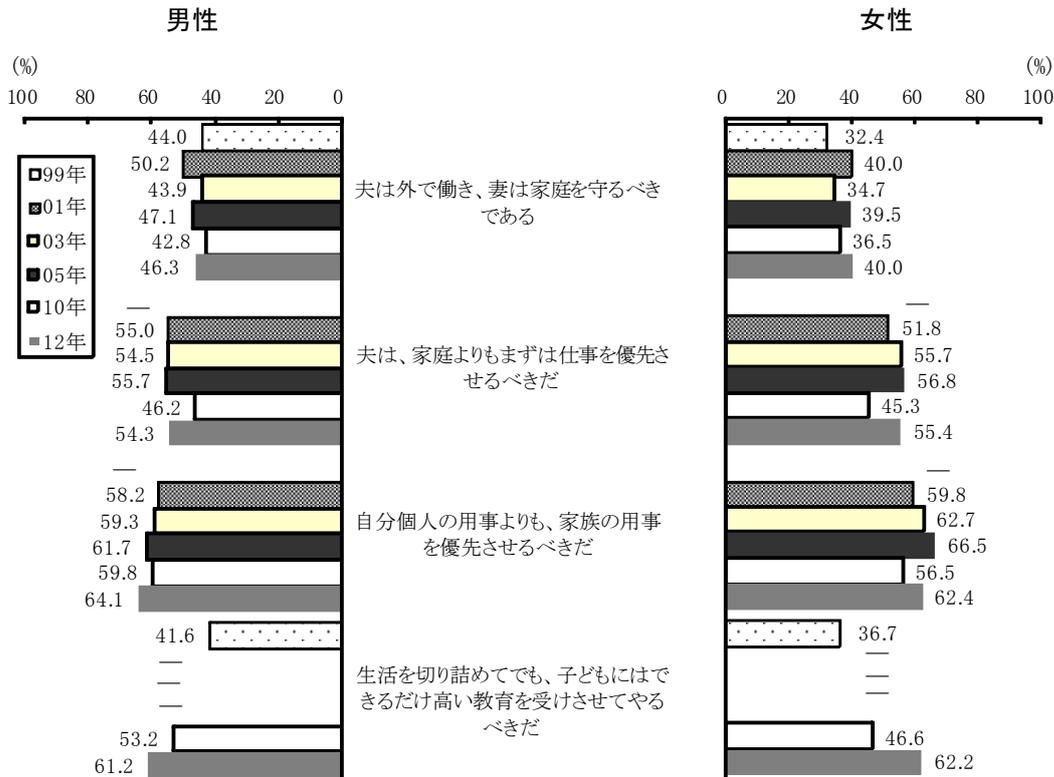
【家族】家庭の役割意識

2010年から12年にかけて、＜父親＞が復権。
 男女とも「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「夫は、家庭よりも
 まずは仕事を優先させるべきだ」という意見を支持する割合が上昇。

図表 15 家庭の役割意識(全体)



図表 16 家庭の役割意識の推移(性別)



注：「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。

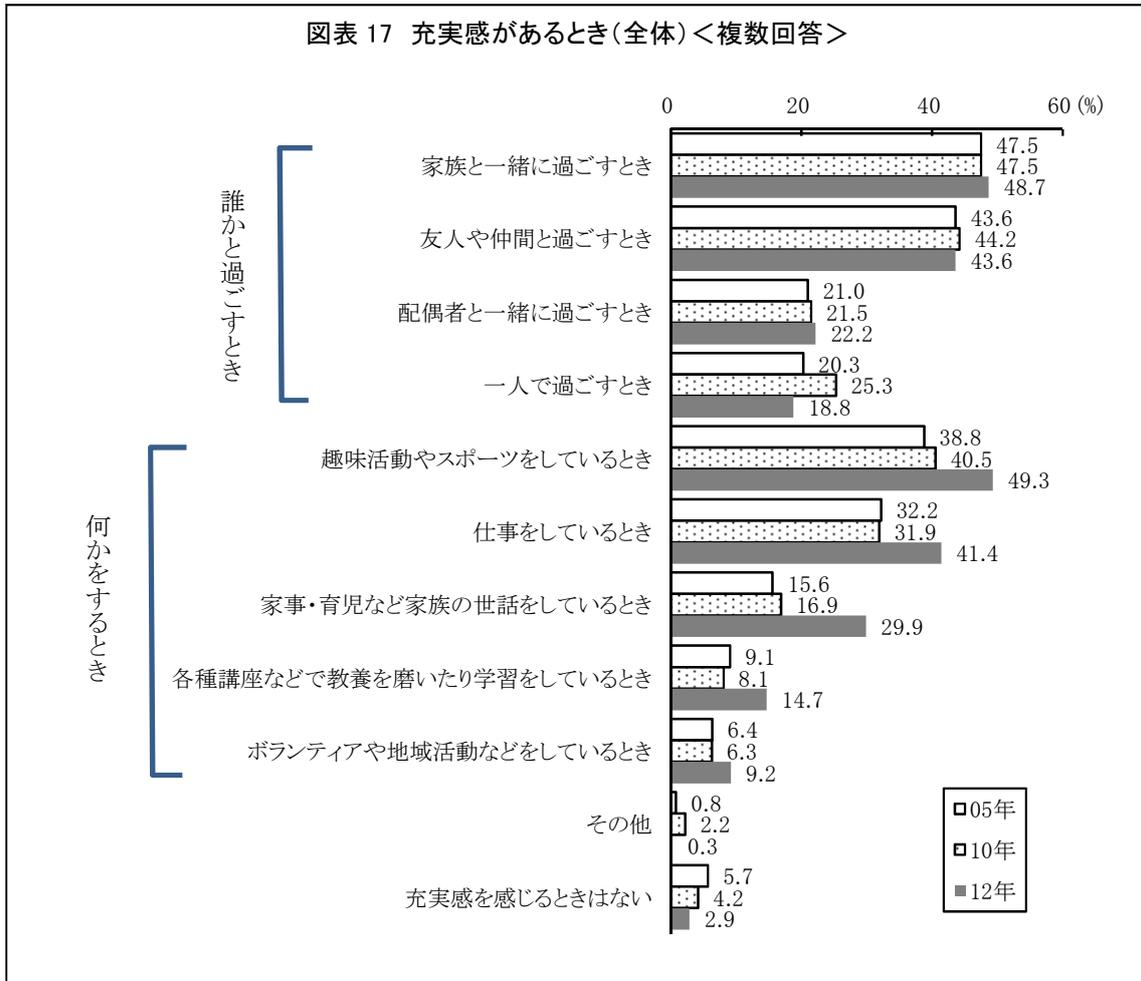
家庭の役割意識を尋ねた結果、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という意見に、そう思う（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）と答えた割合は43.0%、そうは思わない（「そうは思わない」と「どちらかといえばそうは思わない」の合計）は55.5%でした。「夫は、家庭よりもまずは仕事を優先させるべきだ」「自分個人の用事よりも、家族の用事を優先させるべきだ」「生活を切り詰めてでも、子どもにはできるだけ高い教育を受けさせてやるべきだ」という意見にそう思うと答えた割合は、過半数を超えています。

時系列でみると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「夫は、家庭よりもまずは仕事を優先させるべきだ」という意見にそう思うと答えた割合は、2010年から12年にかけて男女とも高まっています。先述したように女性（妻）が「経済的に配偶者を頼りにしている」割合は過去最高になっています。伝統的な父親（男性）像に対する評価が高まりました。

「生活を切り詰めてでも、子どもにはできるだけ高い教育を受けさせてやるべきだ」という意見にそう思うと答えた割合は、今回調査では男性61.2%、女性62.2%で、95年以降大幅に増加しています。

【充実感・人生設計】充実感

「趣味活動やスポーツをしているとき」をはじめ、さまざまな場面において充実感を感じる人が増加。



誰と一緒にいるときに充実感を感じるかをみると、「家族と一緒に過ごすとき」「友人や仲間と過ごすとき」をあげた割合が高くなっています。「一人で過ごすとき」をあげた人は2割未満と少なくなっています。

「家族と一緒に過ごすとき」をあげた割合は、男性が41.0%、女性が55.7%であり、女性の方が高くなっています。

何をしているときであるかをみると、「趣味活動やスポーツをしているとき」をあげた割合が49.3%で最も高く、以下「仕事をしているとき」「家事・育児など家族の世話をしているとき」などが続きます。

図表 18 充実感があるとき(全体、性別、性・年代別)(2012年)

(単位：%)

	家族と一緒に過ごすとき	友人や仲間と過ごすとき	配偶者と過ごすとき	一人で過ごすとき	趣味活動やスポーツをしているとき	仕事をしているとき	家事・育児など家族の世話をしているとき	講座や教養を磨く習いごとをするとき	ボランティアや地域活動などをするとき	その他	充実感を感じるときはない
全体	48.7	43.6	22.2	18.8	49.3	41.4	29.9	14.7	9.2	0.3	2.9
【性別】											
男性	41.0	38.1	21.1	15.2	55.2	46.3	17.1	11.3	8.3	0.2	4.0
女性	55.7	48.7	23.2	22.1	43.8	37.0	41.8	17.9	10.0	0.3	1.8
【性・年代別】											
男性・18～29歳	20.7	65.5	4.6	26.4	58.6	35.6	4.6	12.6	10.3	0.0	4.6
30代	51.1	41.7	23.0	21.6	51.8	52.5	28.8	12.9	5.0	0.0	2.2
40代	49.1	34.0	22.6	17.0	56.6	53.8	23.6	10.4	4.7	0.9	0.9
50代	40.9	25.8	16.1	5.4	49.5	49.5	14.0	6.5	9.7	0.0	8.6
60代	37.3	27.8	32.5	6.3	59.5	38.1	9.5	12.7	12.7	0.0	4.8
女性・18～29歳	53.7	72.2	13.9	24.1	50.0	34.3	25.9	20.4	8.3	0.0	0.9
30代	66.7	47.2	33.3	28.5	45.5	45.5	58.5	16.3	4.9	0.0	0.0
40代	65.4	39.8	18.0	20.3	42.1	42.1	48.1	12.8	9.0	0.8	3.0
50代	48.1	44.2	21.7	21.7	39.5	38.8	35.7	14.7	8.5	0.0	2.3
60代	41.9	42.9	29.5	15.2	42.9	21.0	38.1	27.6	21.0	1.0	2.9

図表 19 充実感があるとき(全体、性別、性・年代別)(2010年)

(単位：%)

	家族と一緒に過ごすとき	友人や仲間と過ごすとき	配偶者と過ごすとき	一人で過ごすとき	趣味活動やスポーツをしているとき	仕事をしているとき	家事・育児など家族の世話をしているとき	講座や教養を磨く習いごとをするとき	ボランティアや地域活動などをするとき	その他	充実感を感じるときはない
全体	47.5	44.2	21.5	25.3	40.5	31.9	16.9	8.1	6.3	2.2	4.2
【性別】											
男性	43.2	34.8	25.1	18.6	49.7	36.4	9.3	6.2	6.2	2.6	4.9
女性	51.2	52.2	18.4	31.1	32.7	28.0	23.3	9.7	6.4	1.9	3.6
【性・年代別】											
男性・29歳以下	24.5	55.4	8.6	25.2	57.6	15.8	2.9	8.6	2.9	3.6	4.3
30代	51.4	35.1	23.2	25.9	53.0	42.7	16.8	7.0	3.2	1.1	4.9
40代	54.3	31.7	19.9	17.2	45.2	41.4	15.6	4.8	5.9	1.6	5.9
50代	40.5	26.6	29.5	16.2	45.7	43.9	6.4	4.0	7.5	1.7	6.9
60代	41.1	30.7	37.2	11.7	48.9	34.2	4.3	6.9	10.0	4.8	3.0
女性・29歳以下	40.5	75.3	8.9	36.7	47.5	24.1	13.9	11.4	7.0	2.5	1.9
30代	56.1	47.4	20.6	30.7	28.1	27.6	37.7	5.3	3.5	2.6	3.5
40代	54.3	48.4	12.7	33.9	26.7	35.7	27.1	10.0	5.4	2.3	5.4
50代	51.3	48.2	22.8	28.9	29.4	31.6	22.8	10.1	7.0	1.3	4.4
60代	50.6	48.9	23.6	27.0	36.3	20.3	12.7	12.2	9.3	0.8	2.5

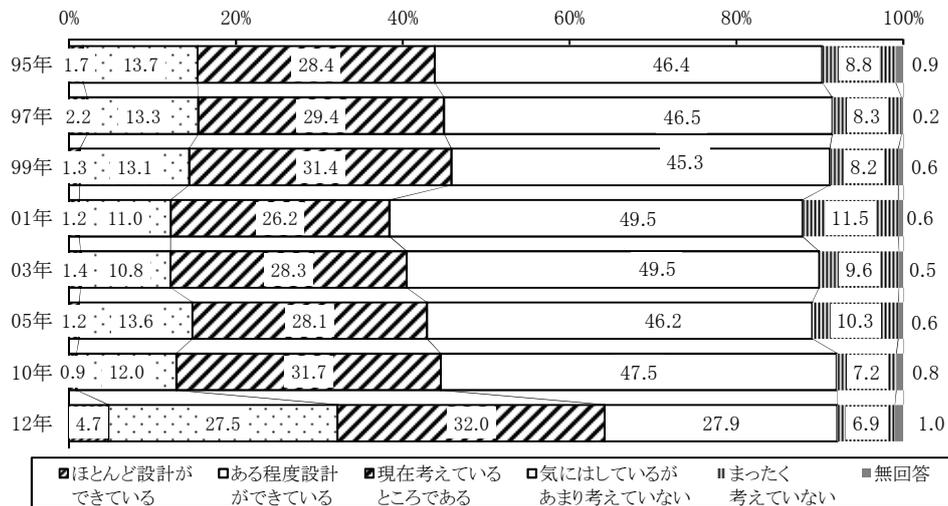
性別に2010年と2012年の回答を比べると、男性よりも女性の方が、「家事・育児など家族の世話をしているとき」「趣味活動やスポーツをしているとき」をあげる割合が高まっています。

同様に、性・年代別にみると、特に49歳以下の女性で「家族と一緒に過ごすとき」「家事・育児など家族の世話をしているとき」をあげる割合が高まっています。「仕事をしているとき」をあげる割合は、49歳以下の男性と39歳以下の女性で高まりました。

【充実感・人生設計】人生設計

2010年から12年にかけて、人生設計をする人・考える人が大幅増加。

図表 20 人生設計(全体)

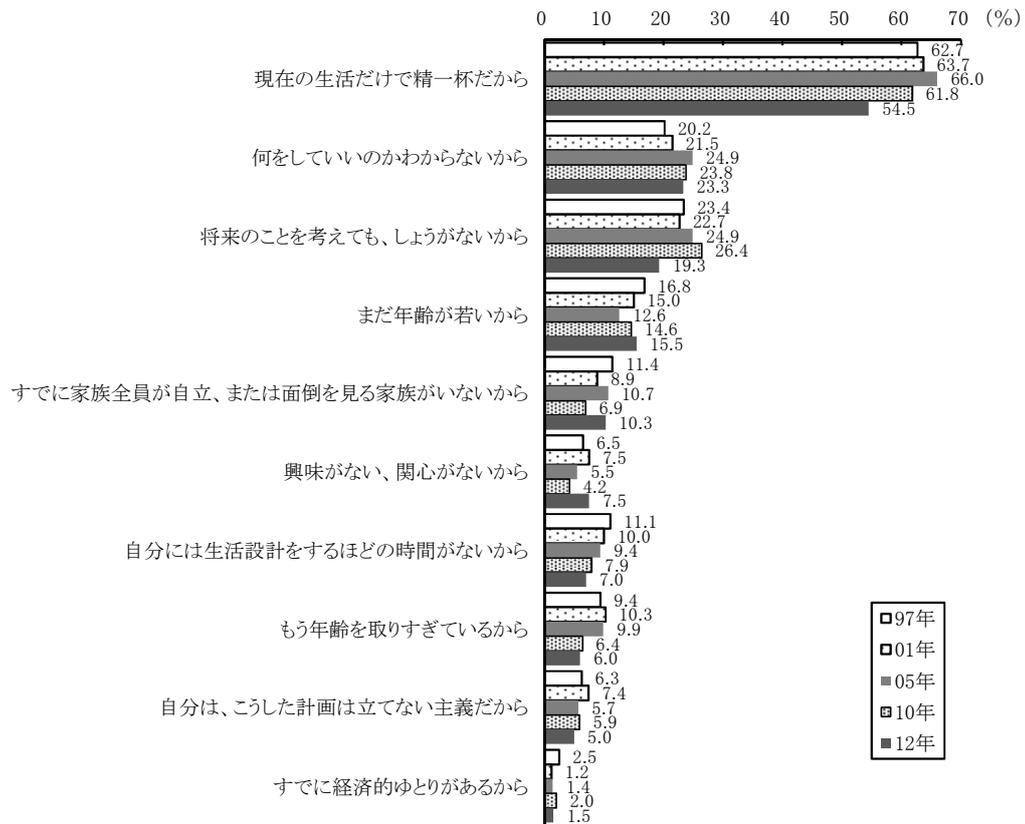


図表 21 人生設計(全体、性別、年代別、地域別)

(単位:%)

	ほとんど設計ができていない	ほとんど設計ができています	ある程度設計ができています	現在考えているところである	気にはしているがあまり考えていない	まったく考えていない	わからない
全体	4.7	27.5	32.0	27.9	6.9	1.0	
【性別】							
男性	6.4	27.9	29.9	26.7	8.2	0.9	
女性	3.2	27.1	33.9	29.1	5.7	1.0	
【年代別】							
18~29歳	2.1	19.5	38.5	29.7	9.2	1.0	
30代	3.4	18.7	42.0	30.5	4.6	0.8	
40代	3.3	25.5	33.5	30.1	7.1	0.4	
50代	4.1	31.5	30.2	25.2	8.6	0.5	
60代	10.4	42.4	15.6	23.8	5.6	2.2	
【地域別】							
東日本	5.2	28.6	32.4	26.3	6.3	1.1	
それ以外	4.3	26.6	31.7	29.3	7.4	0.8	

図表 22 人生設計を考えていない理由



注：人生設計を「気にしているがあまり考えていない」または「まったく考えていない」人が対象。

人生設計の状況を尋ねた結果、「ほとんど設計ができている」が4.7%、「ある程度設計ができている」が27.5%でした。両者を足した割合は、95年以降1割台でしたが、今回調査では3割を超えました。「ほとんど設計ができている」から「現在考えているところである」までを合わせた「人生設計ができている・考えている」人の割合は、今回調査ではじめて6割を超えました。

「人生設計ができている・考えている」人の割合は、60代で最も高くなっています。地域別にみると、東日本では、それ以外の地域よりも、割合が高くなっています。

人生設計を「気にしているがあまり考えていない」または「まったく考えていない」人にその理由を尋ねたところ、「現在の生活だけで精一杯だから」が54.5%で最も多くなっていました。しかし、その割合は、97年以降で最も低くなっています。以下、「何をしたいのかわからないから」「将来のことを考えても、しょうがないから」の順になっています。

《研究員のコメント》

今回調査は、東日本大震災後に人々の家族、地域との絆は強まったのかどうかを明らかにすることを目的として実施しました。主な知見は次の4点です。

第一に、従来から続いてきた地域との関係が希薄化するトレンドは、震災後も変わりませんでした。近所づきあいは少なくなってきており、近所に相談したり頼ることができる人なども減ってきています。この傾向は、大震災の被害を受けた東日本においても同じです。地域の安心・安全のために必要なこととして、「日頃からの近所づきあい」をあげる割合も低下しており、地域の人たちと助け合おうとする姿勢も弱くなっています。

第二に、家族関係（夫婦、親子）は強まりました。夫婦関係をみると、配偶者とよく会話をし、困ったときには相談しあい、余暇や休日と一緒に楽しむ夫婦が増えています。親子関係においても、子どもの話をよく聞き、子どもと余暇や休日と一緒に楽しむ父母が増えました。夫婦関係と親子関係は従来から強まる傾向にありましたが、震災後にその絆が一層強まりました。今後つきあいを深めたい人として「家族」をあげる人も増えています。この傾向は、特に東日本で顕著でした。

第三に、震災前よりも、地震などの災害に対する人々の不安感は低下しました。日頃から不安に思っていることとして、「地震」をあげる人の割合は、2010年には73.2%でしたが、2012年には66.8%まで低下しています。「水害」の割合も、同24.0%から21.7%へと減りました。大震災から1年半以上が経ち、震災の記憶が風化してはいないかと懸念させる結果です。

第四に、人生設計を行い・考え、生活のさまざまな場面に充実感を感じる人が大幅に増えました。大震災は、日本人に対して「生」の大切さや自分の人生に向き合う姿勢を教えたようです。

以上の結果を総合すると、東日本大震災後に、家族の絆は強まり、自分の人生や生活に対する意識が変化しました。一方、地域の絆の希薄化傾向は変わらず、地震など災害に対する不安は後退しました。

(研究開発室 主席研究員 松田茂樹)